

令和 2 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K19890

研究課題名（和文）自己理解促進ツールによる発達障害学生に対するシームレスな支援に関する研究

研究課題名（英文）Research on seamless support for university students with developmental disabilities, using the tool to promote self-understanding

研究代表者

末富 真弓（Suetomi, Mayumi）

筑波大学・人間系・客員研究員

研究者番号：90793919

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では発達障害のある大学生等が自分自身についてよりよく理解し、必要に感じ他者に対し自身について伝えることを支援するツールの開発を行った。自己理解に関するニーズ調査の結果より、自身について「理解することへの必要性や「伝える」ことへの困難さが明らかとなり、またツールのモニター調査の結果より65.5%が自分自身についてよりよく理解することに役立ったと回答があった。本研究で開発したツールは、発達障害のある大学生等が自身を理解する一助となり得ることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の社会的意義は主に2点挙げられる。（1）合理的配慮という観点から発達障害のある大学生等の「自身について理解すること」と「第三者に説明すること」についてニーズを考察した点、（2）不得意や弱みだけでなく強みにも着目し、当事者中心の多分野連携における情報共有ツールとしての開発を行い考察した点、である。

研究成果の概要（英文）：In this research, we developed a tool to help university students with developmental disabilities better understand themselves and to tell others about themselves when necessary. The needs survey on self-understanding revealed the need to "understand" oneself and the difficulty in "telling" oneself. Also, from the results of the tool monitor survey, 65.5% answered that they helped to better understand themselves. It was suggested that the tools developed in this research could help university students with developmental disabilities understand themselves.

研究分野：キャリア教育

キーワード：発達障害 大学生 キャリア 自己理解

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 我が国における障害者関連施策による法的整備と高等教育機関の現状

平成28年4月より「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」及び「障害者の雇用の促進等に関する法律」が施行され、障害者を取り巻く環境に大きな変化が生じている。この2つの法律で共通することは、障害者に対する合理的配慮の提供である。すなわち、大学である高等教育機関に在籍する障害者においても合理的配慮の提供が必要とされる。しかし、高等教育機関において学生個々の障害特性に応じた「合理的配慮」の提供に関する支援体制は十分とは言えない。また、平成20年度以降より高等教育機関において発達障害学生が増加し、それに伴う課題として一般的な学生と比べて発達障害学生の卒業率は低い状況や、卒業までに時間がかかり、卒業後の就職が容易でない状況が明らかになっている。高等教育機関に在籍する発達障害学生に対する支援は喫緊の課題である。

### (2) 発達障害学生における自己理解促進ツールの必要性

障害者に合理的配慮を提供するためには、障害者本人が第三者に配慮事項を適切に表明することが望まれる。しかし、発達障害者の多くは、その障害特性から他者とのコミュニケーション上の困難を有しているため、自身の困難を適切に第三者に表明することが難しく結果的に合理的配慮を受けにくくなるという矛盾も生じている。さらに、自身の特性に気づいていない場合(=自己理解が苦手であること)も多く、それは大学生活のみならず卒業後にもマイナスの影響を及ぼすと指摘されており、発達障害学生の自己理解の促進は、在学中のみならず卒業後の自立にも不可欠である。大学生活を通して、自分の障害特性への理解を深めながら、学生自身で解決できる課題と、解決が困難で周囲に配慮要請すべき課題を整理し、第三者に伝えることに重点をおいた支援は重要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学等の高等教育機関に在籍する発達障害学生が、在学中の学習・心理・キャリアにおける支援を通して、自分の特性を知り自己理解を深め、学生の自立を促進するためのツールを開発することである。

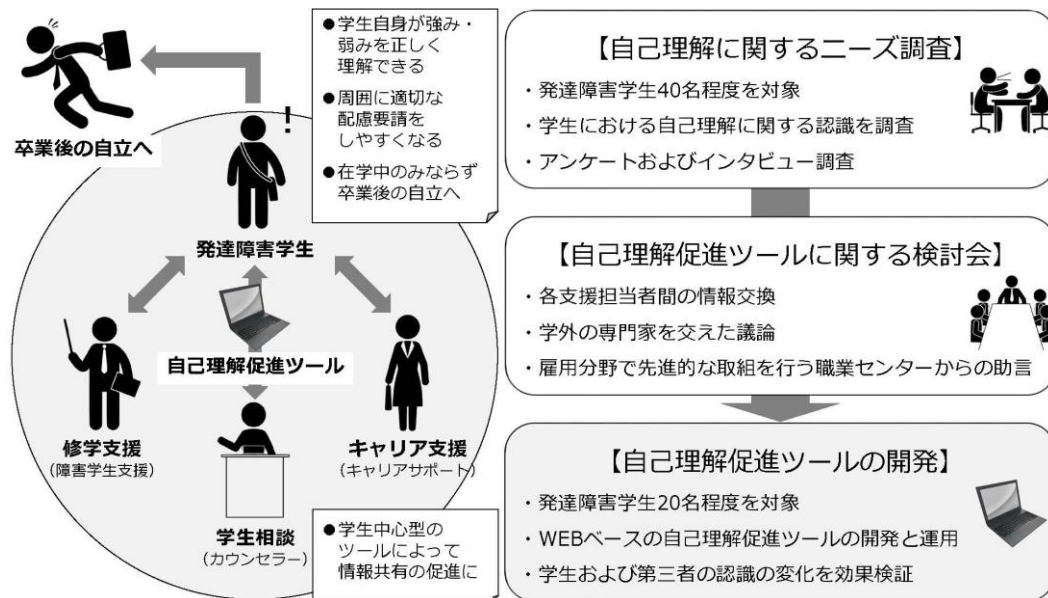


図1. 研究の全体像

## 3. 研究の方法

(1) 研究1: 発達障害を自認する大学生等を対象に5大学26名の協力を得て、「大学生等における得意・苦手に関する自己理解および伝達に関するニーズ調査」として、自己理解の重要性の認識や障害特性を第三者に伝えることに関する認識を聴取するアンケート調査の実施

(2) 研究2：研究1の研究結果をもとに自己理解促進ツールの開発

(3) 研究3：発達障害を自認する大学生等を対象に3大学29名の協力を得て、自己理解促進ツールを3か月間実際に使用してもらってモニター調査を実施。自己効力感尺度 (pre/post)、大学生用レジリエンス尺度 (pre/post)、事後アンケート調査、事後インタビュー調査を実施。右図はモニター募集の案内である。



4. 研究成果

(1) 自己理解の重要性の認識、障害特性を第三者に伝えることに関する認識に関するニーズ調査より、①理解することと②伝えることに以下のような内容が明らかになった。

①理解すること

- 「苦手」については考える機会が多くあるが、「得意」はあまりない。一方、「苦手」「得意」とももっと自身について理解したいと考えており、その機会の提供が望まれている
- 障害を自認することが「得意」にも意識がいくきっかけとなる。「得意」を理解することは自己効力感の向上につながる可能性が考えられる
- 自身を理解することは彼らが生きていく(働くことも含む)上での指針となる非常に重要なものである
- 仲間やコミュニティを獲得するきっかけとなる

②伝えること

- 「苦手」「得意」の双方を伝えることは、就活や卒業後安心して働く上でも必要である
- 伝えることで、周囲(指導教官や友人など)からサポートが受けられ、安心して大学生活を過ごすことができるようになる
- 伝えることへの抵抗感として、周囲の無理解や偏見が多く挙げられており、周囲への理解促進も並行して行っていく必要がある

(2) ツールの開発及び運用を行った。



以下の項目を機能として搭載した。左図は実際の入力画面の例である。

- ①気づいたことを登録  
気づいたこと、自分で or 他人に、どのような時、得意・苦手、対処法
- ②気づきの変化をチェックし、登録  
変わった気づきを選択、変化や経過を入力
- ③気づきのアウトプット  
得意・苦手、場面別、気づきと対処法、PDF と CSV もダウンロードできる
- ④サポーターの設定  
学生本人が許可した(見せてもいい)人に情報を共有することができる

(3) 自己理解促進ツールのモニター調査より、ツール自体の効果の有無がわかる事後アンケート調査の結果を以下に紹介する。

事後アンケート調査では図2に示したとおり、「定期的にログインしましたか？」等12項目に関して「全くそう思わない」を1とし、「そう思う」を2、「あまり思わない」を3、「少しそう思う」を4、「そう思う」を5、「とてもそう思う」を6で、29名に回答を得た。総計では「苦手なことへの気づきを登録できましたか？」が満点174ポイント(29名×6ポイント)

ント)で140ポイントともっとも多かった。しかしながら「得意なことへの気づきを登録できましたか?」が90ポイントと、苦手と得意の入力では50ポイントの差が生じ、ツールを使用しても得意なことへの入力の難しさがあることがわかり、得意に関しても入力数が増えるようなしかけが必要であることが示唆された。

次いで「操作方法は、あなたにとってわかりやすかったですか?」が131ポイントであり、自由記述においても「シンプルな機能で使いやすかった」と複数記載があり、ツールとしての操作性や使い勝手に大きな問題はないことがわかった。

一方、もっともポイントの総計が少なかったのが「登録した気づきを、他の人に見せたり、参考にしましたか?」の56ポイントであり、他者に見せるという段階まで進むことは難しいことがわかった。図3にもあるが、「ツールは自分自身のことを第三者に伝えるのに役立ちましたか?」においても、「全くそう思わない」「そう思わない」「あまり思わない」のネガティブ群が82.7%となっており、本ツールは「伝える」という側面においては効果が少ないことが示唆された。その理由として、「他者に見せることに抵抗がある」を挙げているケースが複数あり、援助希求が難しい傾向にあることが浮き彫りになった。逆に、積極的に活用しているケースとして、相談場面において定期的に本ツールで入力したものをPDF化し、自ら支援者に見せ助言を得ているという例もあり、ツールの活用蓄積数を増やし、より効果的な活用方法を検討する必要がある。

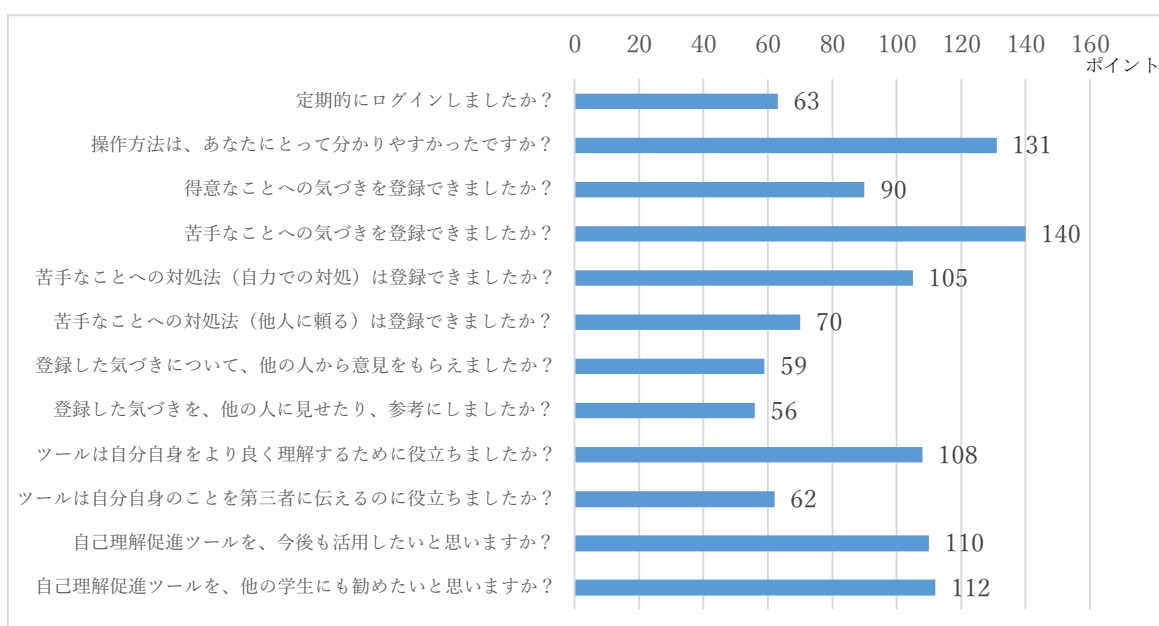


図2. 事後アンケート調査

また、「ツールは自分自身をより良く理解するために役立ちましたか?」では、図4に示したとおり「少しそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」のポジティブな反応が65.5%を占めており、本ツールの目的である自己理解の促進の一助になったことが本研究より明らかになった。

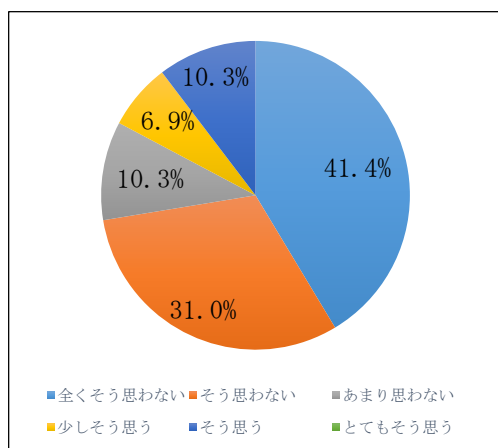


図3. 伝えることへの役立ち度

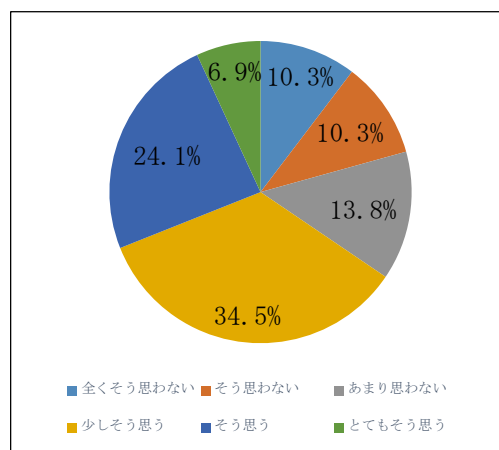


図4. 自己理解への役立ち度

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 末富真弓、佐々木銀河
2. 発表標題 発達障害のある大学生等を対象とした自己理解促進ツールの効果検証
3. 学会等名 全国高等教育障害学生支援協議会第5回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末富真弓
2. 発表標題 障害のある大学生の社会移行について
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末富真弓;佐々木銀河;末吉彩香;杉江征;名川勝
2. 発表標題 大学生等における得意・苦手に関する自己理解および伝達に関するニーズ調査
3. 学会等名 全国高等教育障害学生支援協議会第4回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木銀河;末富真弓;杉江征;名川勝
2. 発表標題 発達障害学生の修学・心理・キャリア相談を通じた自己理解促進ツールの開発ー学生自身の得意・苦手の理解と共有を図るWEBアプリ
3. 学会等名 全国高等教育障害学生支援協議会第4回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	名川 勝 (Nagawa Masaru)  (60261765)	筑波大学・人間系・講師  (12102)	
研究分担者	杉江 征 (Sugie Masashi)  (70222049)	筑波大学・人間系・教授  (12102)	
研究分担者	佐々木 銀河 (Sasaki Ginga)  (80768945)	筑波大学・人間系・准教授  (12102)	